

2023年10月25日（水）

「水曜サロン with 赤堀会長」第5期 第1回（通算60回）

## 教育者が持つべき常識とは何か～学校学習の時間モデルを例に

### 1. 内容

- ・学習が苦手な学習者へのアプローチ
- ・他者の実践を自分の力に変換する インストラクショナルデザイン

### 2. 所感

本日は、教育者が持つべき常識とは何かというテーマでした。教育工学、インストラクショナルデザインの話で、いつどこで学ぶのでしょうかという投げかけもありました。質疑・ディスカッションのやり取りを紹介したいのですが、まずは、鈴木先生のお話から。はじめに、J.B.キャロル氏の学校学習時間のモデルをご紹介いただきました。学習が苦手な学習者への対策はこれということで、 $\text{学習効率} = \text{学習に費やした時間（学習機会と学習持続力）} / \text{学習に必要な時間（課題への適正と授業の質と授業理解力）}$ という公式とその個人差への対応例をお示しいただきました。そして、もう一つ。他人の実践を自分のチカラにするためには、土台となる理論・モデルが必要で、その一つがインストラクショナルデザイン。学校学習時間モデルもその中に入っています。これらは教えるものを選ばない応用技術とのことです。このようなものは、どこで教えているのだろうか？

さて、質疑・議論からいくつか紹介させていただきます。教育は科学である。実践を理論にまとめ、また実践していく。教育課程では、教育工学を学んでこなかった。初年次教育で学ぶのが適切であるが、各大学の先生の裁量となる。また日本では教科書と指導書が充実しているので、教育理論を学ぶ機会が少なくなる。このようなことは、より効率を求める企業の中や社会実践が良いのではないだろうか。一人一台端末になって、学習時間データが取得できるようになり、効率化された時間で別の活動を、という流れだが、学習者によっては時間をかけて学ぶのはどうか。脳科学との関連など。教育者が持つべき常識とは何かという題でしたが、今回のお話から、教育者に限らず、教材を提供する者ふくめて、教育を取り巻く関係者が、このようなことを学び、知ることで、常識となり、科学的な教育に変わっていくのではないだろうかと考えました。このようなものを、教育関係者が、実践の予測や裏付けとして、誰もが必要な時にいつでも学べる世界が欲しいと感じました。

鈴木先生、本日は、大変興味深いお話並びに現状の課題を共有いただきましてありがとうございます。ありがとうございました。

以上